やまがた 文学碑のある風景 23

星の輝き 重なる生涯

地域医療に尽力、歌人の顔も

志田周子

西川町大井沢で地域医療に尽くした医師志田周子（1910～62年）。周子が主人公の映画が製作され、今再び注目を集めている。

西山にオリオン星座かかるを見つつ患家に急ぐ雪路を踏みて

彼女には歌人の顔もあった。周子の短歌が旧大井沢小中学校にある歌碑に刻まれている。鮮やかに情景が浮かぶ一首だ。「周子の生涯」の著者鈴木久夫さんは1976（昭和51）年2月12日付本紙で「大井沢の夜はまたすばらしい。（略）特に美しいのはオリオン星である。夜空に刻みこまれたあの星座は確かに周子の星だと思うようになってきた」と書き、オリオン座と周子を重ねている。

地域の医療を守るという強い使命感の一方で、「雪路の六里を歩み帰りしに走り出て迎ふる子をわれ持たず」という短歌からは、一人の女性の切なさもうかがえる。周子は人生の葛藤を抱えて、人々の命を引き受けていたのだろう。診療所として使われていた建物は周子がいたころと同じ場所に立ち、ここで映画の撮影が行われた。旧診療所に連なる集落の先に、月山が見える。普段山形市から見るのとは違った表情だ。

年の離れたきょうだいにとって、周子は親代わりだった。診療所から少し離れた周子の実家を訪ねた。弟の悌二郎さん（84）に周子の思い出を聞くと、「優しくて厳しい姉さんだった」と一言。患者の容体によっては診療所から離れなかった。豪雪に見舞われる冬は周子に頼まれ、悌二郎さんらが診療所までの道を作ったりもしたという。

冷しるき朝かも吾子は雪道を踏みをはりしと告げ枕辺に立つ（吾子は弟）

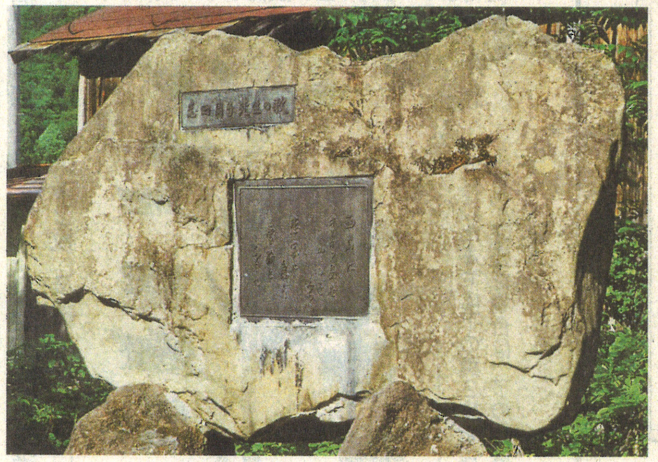
悌二郎さんの記憶を裏付けるようなこんな歌も周子は詠んでいる。

周子は働き盛りの51歳で亡くなる。「もっと長生きしてほしかったなあ」。悌二郎さんがつぶやいた。

（報道部・大坪千絵）

＝木曜日に掲載します

右手前が旧大井沢診療所。奥には月山が見える＝西川町大井沢



歌碑は旧大井沢小中学校敷地内に立つ